

—スタッフ紹介—

役 職	スタッフ名
部 長	森山 あづさ
非常勤医師	倉田 宝保

—概要—

2007年6月1日から呼吸器科から肺腫瘍内科と診療科名を変更し、肺癌をはじめとする呼吸器（胸腔内）腫瘍疾患を専門に診療を続けてきた。

2018年度は乳がんをはじめ、膵がん、胆管がん、大腸がん症例に対する化学療法も数例行っていたが、2019年度は胸部異常陰影、肺腫瘍症例も増え、胸腔内腫瘍に対する治療を中心に細胞障害性抗がん剤に加え、分子標的薬、免疫調整薬を導入した。慎重に効果と副作用の評価を行いながら診療を継続している。

2010年4月からは近畿大学医学部から、2012年4月からは関西医大枚方病院の呼吸器腫瘍科教授・倉田宝保医師が非常勤医師として勤務し、倉田医師は隔週木曜日午前の外来を担当している。

また、2019年4月からは呼吸器内科の外来を近畿大学医学部から久米医師から山縣医師にかわり、水曜日午後大阪大学医学部から三宅医師に代わり白山医師が非常勤医師として担当。今までの腫瘍中心の診療に加えて、肺気腫、COPD、呼吸器感染症、アレルギー疾患、間質肺炎等幅広い呼吸器内科診療が行えるようになった。

常勤医師の気管支鏡指導医を継続し、また近畿大病院呼吸器科から指導頂き、呼吸器外科、呼吸器科非常勤医師とともに気管支鏡を施行。引き続き呼吸器内視鏡関連施設の維持を継続していく。

がん治療と並行して2018年から緩和チームに参加し、麻酔科、薬剤科、栄養管理科、リハビリテーション科など多職種とのカンファレンス、および回診を開始した。1999年にがん対策基本計画が策定され、2017年度の3期目の基本計画ではがん対策の方針として“予防”“医療の充実”“がんと共生”を3本の柱として掲げている。いまや国民病となったがんについて正しい知識を持って、患者に適切な医療を受ける判断をしてもらうよう努めていく。

2018年1月からは毎週月曜日、午後から緩和外来を行っている。

2018年4月からはRST（respiratory support team）チームにも参加し、呼吸器科・白山医師、救急認定看護師、臨床工学士、理学療法士とともに毎週水曜日、午後から呼吸管理を行っている患者を中心に回診を行っている。ICU、一般病棟での人工呼吸管理中の患者に対する、画像の読影、人工呼吸器の離脱にむけての適切な呼吸器設定や、呼吸器ケアを総合的に行う目的で検討を行っている。

—実績—

2019年5月26日緩和研修会開催
2019年度；
肺癌および胸部異常陰影新患者数＝78人
緩和外来新規患者数＝9名

—来年度への抱負—

ここ数年で進行期肺癌に対する化学療法は急速に進歩し、肺癌の重要なドライバー遺伝子であるEGFR,ALK,ROS1に加えてBRAFの解析も進み、個々の患者に効果の高い治療薬を投与するオーダーメイド治療が求められている。

また上記遺伝子異常に対する分子標的薬に加え、免疫調整薬と従来からある細胞障害性抗がん剤との併用の臨床試験結果も出ており、PD-L1タンパクの発現（TPS）を参考にしながら抗がん剤を選択するようになった。

新型コロナウイルス肺炎は中国で1月下旬ころから患者発生の報告が急激に増加し、2月上旬にはクルーズ船を除く国内発症例が報告された。その後、世界的に爆発的蔓延を認め、欧州を中心に数万人単位の死亡例が報告されるまでに至っている。日本でも3月下旬の20日からの3連休を境に急激に発症例が増え、高齢者を中心に死亡例も報告されている。2020年3月時点で外出自粛が呼びかけられる中、感染収束の見通しが見えない状況である。

健康診断、胸部2次検診受診も控えられるようになり、病院での不急の受診は控えられる傾向にある。

がん患者は担癌状態である時点で免疫力が低下しており、中国からの報告ではがん患者のCOVID-19罹患頻度が高く、呼吸状態が重篤化することが報告されている。がん治療を継続する上で、細胞障害性抗がん剤での骨髄抑制による易感染性、分子標的薬、免疫調整薬による間質性肺炎の発生などに注意が必要である。

今後も必要ながん治療は行いながら、コロナ蔓延期中で、患者に有益な診療をおこなっていくことが求められる。

<施設認定、関連施設>

- 日本呼吸器関連施設
- 日本呼吸器内視鏡関連施設(気管支鏡)